

ついに「めぐるう」が新聞掲載

知ろう、探ろう
めぐるう新聞

目黒版

発行：「めぐるう」編集部
執筆：岩城正姫、瀬口篤輝
磯崇大、大坪琴里
小泉慧理那

昨年10周年を無事に迎え、編集員が束の間の休憩をとっていた4月24日。私たちは目黒区総合庁舎の会議室にて読賣新聞社の方から取材を受けた。取材時間は1時間と少ないながらも「めぐるう」の魅力を伝えることができた。毎日発行されている「新聞」と年に1回発行する「情報誌」、ジャンルは違っても同じ「情報」を扱うプロの仕事を見ていた良い機会となった。今回は実際の取材の様子を皆さんに紹介する。



読賣新聞朝刊都民版(2018年4月28日)



▲会議室に向かう編集員。「道に迷った。大会議室の脇を通ってすごく細い通路に感じた。」と新聞社の取材を受けるという非日常的体験にいつも以上に緊張している様子。

中)がわからず右往左往したり、集合時間を1時間間違えたりして大変なことになるってんだよねえ(・_・)

その後、日程調整や事前準備などを経て、9・10号の編集長・副編集長などめぐるう編集員の代表5人で取材を受けることになった。ようやくやってきた当日、期待と緊張を胸に記者の方の到着を待った。(というとかっこいいのだが、実際は取材会場の会議室(しかも総合庁舎の

「めぐるう」新たな一歩へ

2018年3月は、例年のごとくやってきた。桜は…まだ咲いていなかったが、卒業式や修了式が来て、春休みが訪れ、いつものようにめぐるうが発行された。編集員にとって、いつもと何も変わらない春だった。

しかし、私たちにある機会が訪れた。

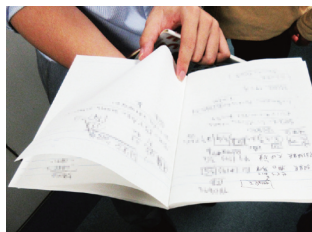
この年「めぐるう」は記念すべき10周年を迎え、目黒区の子育て支援課は大々的に宣伝を行った。そしてなんと、そのプレスリリースに読賣新聞社が目をつけたのだ。こうして、区のタウン誌に大手新聞社からの取材が飛び込んできた。

その後、日程調整や事前準備などを経て、9・10号の編集長・副編集長などめぐるう編集員の代表5人で取材を受けることになった。ようやくやってきた当日、期待と緊張を胸に記者の方の到着を待った。(というとかっこいいのだが、実際は取材会場の会議室(しかも総合庁舎の

というわけで、記者の石原さんが到着し、編集員の威信をかけた取材が始まったのである。

取材は最初、自己紹介から始まるかと思っただがそれは適当にさっそく取材が始まった。取材を早く体験したい私たちにあってむしろそれはありがたかった。最初は緊張するものか、と愚問していたが、石原さんの人あたりのいい性格に私たちは緊張せず和やかに取材を受けた。

取材の中で、さまざまな話を話した。主に自分たちが関わってきた号(ここ数年のもの)のことや、十年間の歴史について、例えば散歩、ハーゲンダッツ、同窓会、日韓交流のことなど、話していくうちにどんどん、みんなが白熱していくのがわかった。しまいには「話し足りない」という意見まで出てきた。



▲取材メモ。メモは20ページ以上にも渡った。中を見てみると私たちに解読不可能な文字の羅列であった。石原さんに聞いてみると速記の文字は自己流によるものだという。